

ONNANOKO FARM
IN THE DIFFERENT WORLD

異世界で美少女に種付けをおこなう子牧場の女の管理人になりました！

小説 上田まがの
挿絵 綾瀬はづき



試し読み版

序章	気付けばそこは異世界だった	006
一章	種付け牧場	016
二章	餌やり作業くエルフはチョロい	037
三章	搾乳作業く獣人娘のおっぱいは敏感	079
四章	腸内洗浄く尻で悶える女騎士	113
五章	種付け開始	148
六章	ボクがキミを守る	193
七章	ひたすら種付け種付け種付け作業！	224
終章	いつまでも種付け生活	243

登場人物紹介

マリーベル＝アスナフカ

長命なエルフ族の長の娘。非常にプライドが高く、人間相手にわざわざ子供を作る必要などないと考えている。



リン＝アハト＝レフト

凛として生真面目な王国の女騎士隊長。種付けは女の義務と受け入れて羞恥をあまり感じないため、性的に感じにくい体質。



ファイナ

天真爛漫で無邪気な半獣の少女。子作りはすごく幸せなことだと仲間に聞いて牧場にやってきた。



みくもはるき 三雲春樹

背が低く可愛らしい面立ちのせいで同年代よりも幼く見られること以外はごく普通の学生。女子に男扱いされないのが悩み。

ハル＝オークラフト

名門魔術師の家系であるオークラフト家の後継者で、異世界に春樹を召喚した有能な若手魔術師。

それを見てマリーは呆然と瞳を見開いた。

（アレを今度はわたくしが舐めますの？ 無理……絶対無理ですわ。第一、な、なんでわたくしがこんなことをしなければなりませんの？）

エルフは半不死と言っても過言ではないほどの長命である。わざわざ子供を新しく作る必要などないはずなのに……。

（お母様は半不死といえども次世代が生まれない種族は歪であり、滅びるといつていましたわ。でもだからってこんな人間なんか……）

母の言葉も一理あると思い、澁々種付け牧場に来ることを受け入れた。しかし、いざとなるとやはり躊躇ってしまう。

「次は……えつと……マリーさん。その……お願いします」

そんなマリーの迷いなどハルキは気付くこともなく、柵の中へと肉棒を入れてきた。目の前に肉棒が突き出される。

（う……お……大きい……。それにこの匂い……凄く臭い。なんて生々しい匂いですの）
噎せ返りそうな程の牡の匂いに鼻腔がくすぐられる。想像以上の状況にマリーは身体を硬直させた。

身体を硬くし、呆然と肉棒を見つめる。

「……マリーさん？」

先の二人の様にすぐに舐めてもらえらると思っていたらしいハルキが首を傾げてきた。

「マリーベル？」

ハルも無表情であるけれど怪訝そうに尋ねてくる。

「どうかしたにゃ？」

「マリー？」

ファイナとリンも同様だった。

「べ、別にどうもしてませんわ。ただ、これは必要なことですか？」

みんなの視線を受けつつ、絞り出すように口にする。

「必要なこととは？」

ハルが首を傾げた。

「ですから、わたくし達は種付けしてもらう為にここに来ていますのよ。こんな人間如きのせ……生殖器を口で舐めるなんて聞いてませんわ。種付けをして、それで終わりではありませんの？」

「いや、その点についての勉強はお前だっしてしているだろ」

リンが口を挟んでくる。

「頭では妊娠するつもりでも、私達の身体——つまり本能まではそういう気分にはなれない。何故なら私達はそういう呪いをかけられているからだ。その呪いを弱める為に口でしたりすることは必要だ——というのは一般常識だろ」

「もちろん分かっていますわ。でも、わたくしはこんなことをしなくても妊娠くらいでき

ますわ！ 人間如きの生殖器を舐める？ わたくしに人間に奉仕しろといえますの？」

エルフは人間よりも遥かに長命な種族だ。魔力だって高い。さらに、人間と交わっても生まれるのは純粹なエルフだけだ。つまり、生命体として人間より優れている証拠である。そのような高位の存在であるはずのエルフが、いくらエルフには女しか生まれないとはいえ人間如きに奉仕しなければならぬなんてプライドが許さない。

「絶対にごめんですわ！ フンッ」

目の前の肉棒から視線を外す。

「むう」

ハルが困った様な吐息を漏らした。

「あまり我が侷はいわない方がいいと思うにゃ」

「わたくしがいつてるのは我が侷などではありませんわ！」

種付けさえしてもらえればそれでいい。それ以上のことなんかする必要がないのだ！

「うーん、参ったな。こうなったら無理矢理にでも……」

するとリンがそのようなことを口にし始めた。

「——なっ！」

流石に聞き捨てならない。

慌ててマリーは抗議の声を上げようとする。

「無理矢理って……それは駄目だよ！」

だが、先に声を上げたのはハルキだった。

「でも、これは必要なこと。この世界に生きる女の義務」

ハルが冷静な顔で告げる。

「そうかも知れないけど、俺は無理矢理するなんてイヤだ！ その……マリイさんがイヤだっていうのなら、このまま帰してあげても」

けれどハルに対してハルキは反論をする。

「しかしだな、子供を作るといふのは私達にとつて本当に大事なことなんだぞ」

「種付けを拒否したら悪い怪物に食べられちゃうつてお話を聞いたことがあるにゃ！」

「世界を存続させる……それが大事なのは分かります。でも、大事なのはマリイさんの気持ちですよ！」

三人に対してハルキは引かない。

彼はマリイを庇っていた。

マリイはそんな姿を呆然と見つめる。

まさか人間の男が自分を庇うなんて思ってもみなかったから……。

だからだろうか？ なんだか妙に――

(腹が立ちますわ)

イライラしてきた。

誇り高いエルフである自分が人間如きに庇われるなど、そんなことあつてはイケないと

思う。許してはならない。

「……や、やりますわ！」

だからだろうか？ さつきまであんなに嫌がっていたのに、あっさりと口淫を受け入れるような言葉を口にしてしまっていた。

「——へ？」

まさかこれほどあっさり言を翻すとは思ってもみなかったのか、四人が呆然とした様子で瞳を見開き、自分を見つめて来る。

「え？ い、今なんて？」

「だから……その……口でしますわ。すればいいんですよ！ すればっ！」
意地になったみたいにそう口にした。

「な、なんか想像以上に凄い手のひら返しだにや」

「いや、これは手のひら返しというのか？ まあファイナが言おうとしてることも分かるが……」

リンとファイナが呆れたように呟く。

「う、うるさいですわ！ 気分が変わりましたの。だからその、すればいいのでしょうか？」

「……それは……そうみたいだけど、でも、本当にいいの？」

どう反応すればいいか分からない——とでもいうような表情でハルキが自分を見つめて

来る。

「わたくしは構わないといっていますの。だからすればいいのですわ。でも、その前に一つだけ条件がありますの」

人間に庇われるのはプライドに関わる。だから口淫をする——その覚悟はできた。

けれど、ただ人間相手に自分が奉仕のような行動をするのは気に食わない。だから——。「わたくしに敬意を示しなさい」

そう告げた。

「敬意？」

不思議そうにハルキは首を傾げて見せてくる。

敬意の意味が分からないといった様子だ。

「まったく、これだから人間は……。はああああ……。いいですよ、敬意といったらキスに決まっていますわ」

「き、キス？」

「そう。お母様に習いましたの。キスという行為はする側が相手に対して最大級の敬意を示す行為だと。ですから、しなさい！ わたくしにキスというものを！」

自分が上でハルキが下だ。それを敬意を払わせることによって確定させる！

「敬意がキス……？ え、エルフって独特なんだな」

「なんですか？ できませんの？」

ギロツとハルキを睨む。

「いや、そんなことない。でも、本当にいいの？」

「わたくしがしろといつていますのよ！」

鋭く視線を細めた。

「わ、分かったよ」

この迫力に気圧されたようにハルキは頷く。

「その……それじゃあえつと……キス……行くね」

ようやくする気になったらしい。

「ええ、来なさい」

頷きつつ、顔をずいっと前に出した。

「……では」

ハルがパチンツと指を鳴らす。

すると柵が消えた。キスをしやすいようにしてくれたらしい。人間にしてはなかなか気が利くようだ。

などということを考えつつ、口付けしやすいように顔を上げる。

「その……それじゃあ」

そんなマリーに応えるように、ハルキが唇を寄せてきた。

「んっ……」

「んんっ」

唇と唇が重なり合う。

(あ……あつたかい……)

途端にジワツと染みるような温かさが伝わって来た。自然とマリーは瞳を細める。

(なにこれ？ ただ唇と唇が合わさってるだけなのに、なんだか妙に安心する)

そのような感情まで膨れ上がって来るのを感じた。

(なんかこれ……もつとこうしていたいみたい……)

想いがわき上がる。

だが、キスはそこで終わりだった。

唇が離れていく。

「あっ」

思わず名残惜しそうな声を漏らしてしまった。

「えっと、これでいいかな？」

唇を離れたハルキが尋ねてくる。

「それはその……」

確かにこれでいい。ハルキは言った通りにしたのだから……。

だが――

「駄目ですわ」

気がつけばマリーはそう口にしていた。

「駄目って……何故だ？ ハルキはキスをしただろ」

リンが口を挟んでくる。

「……確かにその通りですわ。でも、最大級の敬意を表すキスはただ唇を重ねるだけではなく、舌まで挿し込むと聞いたことがありますわ。ですから……そこまでしないとわたしは満足しませんわよ」

そう。その通りだ。

母にはキスというのは舌まで挿し込んで完成だと習ったことがある。だからこんな程度で満足するつもりはない。

「舌まで……」

ゴクツとハルキが息を呑むのが分かった。

「その反応……もしかしてイヤですか？」

「いや、そ、そんなことはない。寧ろその……し、したいよ」

したい——ハルキはそう言った。

（したい？ わたくしにキスを？ つまり……わたくしに敬意を払いたい思っているということですか？）

ハルキの言葉にそんなことを考える。

すると、何故かそれだけでドキドキと胸が高鳴るような感覚を覚える自分がいた。生ま

れて初めての感覚だ。なんだか心が高揚しているような気がする。

しかし、そんな感情を表には出さない。

「したいなら……早くしてそれを証明なさい」

ツンとした態度で再び唇をハルキへと向ける。

「わ……分かった」

この求めにハルキは頷くと共に、再びマリーへと唇を近づけてきた。

(近づいてきましたわ。また……キス……)

先程の口付けで感じた身体が熱くなるような感覚を想像する。

するとそれだけでさらに心臓がドキドキと高鳴り始めた。

「んっふ……むちゅっ……」

そして再びのキス……。

途端にそれだけで全身から力が抜けそうになった。

けれどそれだけで終わりではない。

ハルキは先程マリーが求めた通り口腔に舌を挿し込んでくる。

「むっふ……んんっ……くっふ……んんんっ……」

入ってきた舌がマリーの口腔をかき混ぜて来た。その動きは実に拙く、ぎこちないものである。キスになれていない——初めて口付けをするマリーでも分かるくらいだった。もしかしたらハルキも口付けするのは初めてなのかも知れない。

(わたくしが……初めての相手?)

そんなことを考えてしまう。

途端にさらに肉体が熱く疼き始めるのを感じた。

くっちゅ……んちゅるっ……。くちゅっくちゅっくちゅっ……。

熱気に押されるように自分からも舌を蠢かせる。

(相手はただの人間。下等生物……。それなのに……。何故ですか？ なんだか凄く気持ちがいい)

堪らない程の心地よさ。

それに溺れる様にひたすらグチュグチュと重ね合わせて唇と唇の間から卑猥な音色を響かせ続けた。

「はぁ……はぁ……これで、いい？」

やがてハルキが唇を離す。

ツプツと口唇と口唇の間に唾液の糸が伸びた。

「……はぁ……はぁ……はぁ……ええ、構いませんわ。貴方のわたくしに対する敬意、よく分かりました」

ハルキを見ていると何故かそれだけで全身が熱くなっていくような気がする。

そのような感覚を隠しつつ、頷いたマリーに対し「それじゃあ、始めて」とハルキが口淫を促すような言葉を向けて来た。

「い、いわれなくても分かっていますわ。ほら、立ちなさい」

ハル達に見られていた——今更ながらに考えてしまう。すると何故か羞恥を覚えてしまう自分がいた。

そんな恥ずかしさを誤魔化すように、キスをする為に屈んでいたハルキに命じる。

「あ、うん」

ハルキが立ち上がる。同時に再び柵が作られた。

その柵の間から肉棒が突きつけられる。

ヒクヒクと震える男性器——その大きさはキスなんかをした為か、ファイナやリンとした時よりも大きくなっている様に見えた。

（凄い……大きい……。それに匂いも……。これを舐める？ そんなこと……。でも、この男……ハルキはわたくしの求めに応えた。となればわたくしも誇り高きエルフとして約束は守らないと。だからこれくらい問題ありませんわ）

緊張はある。

しかし、ファイナもリンもしてのけた。

人間と亜人——エルフに及ばない存在ができたことだ。自分にできないはずがない。

そんなことを考えつつ、これまで二人がそうしてきたように「んっちゅ」とマリーは肉棒に唇を押しつけた。

もちろん一回だけでは終わらない。

（一応わたくしだって口淫の仕方は学んで来ていますわ。だから、こうすればいいのでしよう？ こんな風に口付けして、舌で舐めれば……）

女はいつか必ず種付け牧場に入らなければならぬ。その日の為の一般教養として性戯に関して教え込まれている。

実践はしたことはない。けれど知識はある。

記憶を総動員し、幾度も幾度も肉先を口唇で刺激した。

当然の様に舌を伸ばし、ペロペロと屹立を舐めたりもする。

「はっちゅ……んれろっ……。れろっれろっ……。んれろおお……」

肉先から肉茎、根元まで——肉棒が唾液塗れになるほど濃厚に舐めまくった。

ただ、その動きはやはり拙い。その上既にハルキは二度も射精しており、少し舐めた程度では精液を放つてくれなかった。

「んっじゅ……くちゆるっ……。ちゅずるるるう」

先程リンがそうした様に吸ったりもしてみせるが、やはり出してはくれない。

「なんで……射精しませんの？」

「ごめん。二度も出したせいで鈍くなってるみたいだ」

「それじゃあ……もう射精できませんの？」

「そんなことはないよ。でも、その、舐めて吸うだけじゃ駄目だ」

「それじゃあどうすれば……」

「……く、唾えてもらってもいいかな？」

遠慮がちにそんなことを訴えてくる。

「……わ、分かりましたわ」

人間の性を唾える——本来ならば受け入れがたい願いだ。しかし、自分だけ射精させられないというのは悔しい。だからリンは意を決して口を「んあつ」と開けると、肉棒を唾えた。

「むっふ……んふうううっ……」

（お、大きいですわ。顎が外れてしまいそう。でも、ただ唾えるだけじゃ駄目。確か、男を射精させる為にはこうやって……舐めながら、頭を前後に振って扱とくことが必要なはず……。こう……こうですわよね？）

必死に口淫の方法を思い出し、ただ唾えるだけではなく頭を前後に振り始める。

「もっじゅ……んじゅっぼ……むじゅぼっ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼっ」

ただ頭を振るだけではなく、口唇で肉茎を締めつけているせいで少し頭を振るだけで先程まで以上に下品な音色が響いてしまう。それでも止まることなく肉棒を扱とき続けた。

（これ……大きくなってきましたわ。先っぼがパンパンに膨れて……）

口端から唾液が零れてしまうほどに頭を激しく振り続けたお陰か、最初に唾えた時以上に肉棒が膨れ上がり始める。しかもただ大きくなるだけではない。ピクッピクッと震え始めもした。

「こりえ……震えてましゆわ。もひかしてれしよれすの？」

「ああ……うん。出そう。出ちやいそうだよ」

否定することなく射精を訴えてくる。

「しよう……なら……いいですわよ。出して……わらくひの口の中に……精液を出して……かまいましたえんわよ……んっじゅ……もじゅっぽ！ くじゅぽっ！ じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ!!」

射精というのは気持ちいいからする行為だと聞いたことがある。つまり自分でハルキが気持ちよくなってくれているのだ——そう考えると嬉しさを感じる自分がいた。

そのような感情の赴くままにさらに口淫を激しいものに変える。これまで以上に強く口唇で肉茎を締めつけつつ、頬を窄めて肉棒を吸った。

「ああ、それ……気持ちよすぎる！ もう駄目だ！ 我慢できない!!」

この行為に遂にハルキは限界を訴えてくる。

同時に彼はギュッとマリーのツインテールを掴んできた。

「んんっ!!」

唐突すぎる行為に一瞬マリーは身体を硬くする。

その刹那、早く出したいと訴えるみたいにハルキは腰を振り始めてきた。

「あぶばっ！ んっぶ！ むふうっ！ もっもっもっ！ むひゅううっ！」

大きすぎる肉棒で喉奥を激しく突いてくる。

(当たってる。こんな……激しい……息ができない。死ぬ……。わたくし……これ……ペニスで……突き殺されてしまいますわ。無理！ 止まって……止まりなさいいいっ！) 流石に辛すぎる状況だった。

「んっふ！ んーっんーっんぶううっ！ おっぼ……ぶびよおっ！」

声にならない声で止まってくれと訴える。

しかし、ハルキは止まってくれなかった。

それどころかさらに腰を激しくしてくる。

(ホントに駄目。ああ……死ぬうう……。わたくし……壊れてしまいますわ)

気を失ってしまうのではないかとさえ思える程の勢いだった。

だが、感じるものは辛さだけではない。

(なのに……ああ……これ、どういうことですか？ 激しすぎるのに……苦しいのに……)

なんだか……わたくし……き、気持ち……いい？)

自分でも理由は分からない。けれど、口の中をかき混ぜられるという状況に愉悅の様なものを覚えてしまう。身体中から力が抜け、思考が蕩けていく様な感覚だった。

全身が発熱でもしているみたいに熱くなっていく。頭がボーッとし、思考が歪んでいくのを感じた。

まるで口の中だけではなく頭の中までかき混ぜられているかのように……。

いや、それだけでは終わらない。



次らしい。

しかし、一体何をするつもりなのだろう？

「搾乳作業をする」

抱いた疑問に答えるように、実に端的にハルはそう言った。

「搾乳？ それってつまり……む、胸を？」

「そういうこと」

「……でも、なんの為に？」

首を傾げると、ハルは「簡単なこと」と言って搾乳を行う理由を説明してくれた。

「リズムスカに生きる人々の身体には魔王の呪いが染み込んでいる。これを搾乳という形で搾り出す。完全に排除することは不可能。でも、搾乳を行えばかなり呪いを弱めることが可能になる」

「なるほど……」

頷きつつ、三人の胸を頭の中に思い浮かべる。

ファイナの今にもビキニを破ってしまいそうな程大きな胸を、大きさはさほどではないけれどビキニの上からでも分かるくらい美しい形をしたマリーの胸を……。

リンに関しては――

（ノーコメントということにしておこう）

取り敢えず考えないことにした。

そんな彼女達の胸を搾る——そう考えると、なんだかそれだけで身体が熱くなっていくのを感じた。特に下半身が疼いてしまう。自然と手をグーパーと開いたり閉じたりもしてしまった。

「……………」

そんな春樹をハルがジッと見つめて来る。相変わらずの無表情で…………。

「あ、いや、なんでもないよ！　そ、それでその……搾乳ってどうやるの？」

流星に恥ずかしい。

誤魔化すように慌てて尋ねる。

「簡単なこと、これを使う」

そう言うのと見たこともないような機具をどこからかハルは取り出して見せて来た。

いや、機具という言い方は相応しくない。

実際テーブルの上に置かれたそれはうねうねと動いていた。機械ではない。一見すると植物のように見える。色は緑。ニチャツとした粘液に包まれた蛇を思わせる胴体部には血管のようなものも浮かび上がっている。太さはだいたいバナナ程度だろうか？　先端部だけは異様に膨れ上がっていた。

これはなんというか——

「触手？」

という表現が一番なように感じた。

「そう、触手。でも、ただの触手じゃない。搾乳用触手。これを三人の胸に装着して、胸を搾る」

実にあつさりとハルはそういつてのけてきた。

*

「こんなものをつけますの？ うねうね動いてて……なんだか気持ちが悪いですわ」

「そうかじゃあ？ ファイナは結構可愛く見えるけど……」

「これが可愛い？ 貴女……美的センスがどうかしてますわよ！」

翌日、牝舎に持ち込んだ搾乳触手を見たファイナとマリーがそのようなやり取りをし始めた。

「……………」

ただ、リンだけはなんだかとても静かである。

口うるさいわけではない。けれど、決して無口というわけでもない女騎士が、どこか憂鬱そうな表情を浮かべていた。

「リンさん？ どうしたの？」

ちよつと心配になつてしまう。

「……いや、別になんでもないさ。ただその……これから現実を突きつけられることになるかと思うとな……ふふっ……」

自嘲気味にリンは笑う。

「……あっ」

彼女が何を言わんとしているのか察し、取り敢えずこれ以上突っ込まないことにした。

「それじゃあ始めて」

ハルが無表情で告げてくる。

「あ、ああ……分かった」

頷くと共に触手を手に取ると、取り敢えずまずはマリリーのスペースに入った。

「やっぱりそれをつけないといけないのですわね」

搾乳触手をつけやすいように上半身を起こしたマリリーがそう口にしてくる。

「うん。そうらしい。やっぱりイヤ？」

「……別に、イヤではありませんわ。わたくしだってもう覚悟はできていますから……。

でも、分かっていますわよね？ まずはおたくしに……」

「敬意を見せればいいんだよね？」

「そうですわ……んっ」

顔を上げて見せてくる。

視界に艶やかな唇が映った。

そこに唇を重ねる。いつも通り舌を挿し込み、グチュグチュと口内をかき混ぜた。

「んっふ……はふうううっ……。 やっぱりこれ……気持ちいい……」

ボソッとマリリーが呟く。

「え？ なに？」

「なんでもありませんわ！　そ、そんなことよりその……するのなら早くなさい！」

「あ、う、うん」

マリーの迫力に気圧されつつ「そ、それじゃあいくね」という言葉と共に胸を隠していたトップスをずらした。

途端にプルンツと弾けるように乳房が露わになる。透き通るような白い肌。その先端部を鮮やかに彩るピンク色の乳頭——魅力的な肢体が視界に映り込んだ。

呼吸に合わせてゆつくりと上下する肌——実に艶めかしい。見ているだけで息が荒くなつていく。

「は、恥ずかしいのですからあまり見るんじゃないやありませんわよ！　早く……それをつけないさい」

視線に羞恥を覚えたのか、マリーはさらに顔を赤く染めてくる。

そんな彼女の言葉に逆らうことなく、ツンと少し上向き加減の形のいい乳房に搾乳用触手をグチュツと密着させた。

するとクパツと触手の先端が開き、乳房を包み込んだ。

「あふんっ……はああああ……これ……なんだか生温かいですわ。それに……凄く吸い付いてくる……。くんんっ」

途端にビクビクツとマリーの肢体が震える。なんだか心地よさそうに歪む表情が魅力的

だった。いつまでも見ていたいと思ってしまうほどに……。

「次」

けれどハルに促されてしまう。

「それじゃあ次はリンさん」

「……そうか……その……頼む……」

マリー同様上半身を起こしたリンはやはり恥ずかしそうな表情を浮かべている。

「その、それじゃあ……いきます」

普段は格好良ささえ感じさせる女騎士が見せる羞恥に珍しさを感じつつ、彼女のトップスに手をかけ、乳房を剥き出しにした。

リンの胸が露わになる。

その、一応それなりに膨らんではいるけれど、見ようによつては板――

「……失礼なことを考えてはいないかハルキ？」

ジロツと切れ長の瞳が見つめられる。

「へ？ あ……べ、別にそんなこと考えてませんよ」

「本当か？」

「もちろんです。凄く魅力的ですよ」

嘘じゃない。実際大きさはないけれど、小さいのは小さいなりに魅力的だった。

僅かに膨らんだ上向き型の乳房が上下する有様や、白い肌に彩りを添えるように鮮やか

なピンク色をした乳首が実に艶めかしく、見ているだけで興奮してしまう。

「そ……そうか……その、そ、それじゃあ頼む……」

魅力的という言葉にさらに羞恥を感じたのか、より頬を染めてきた。そのような姿に可愛らしさを感じつつ「いきますね」と搾乳触手をリンの胸へと寄せていった。

「んくんっ」

グチュツと触手が密着した途端、リンもマリー同様肢体を震わせる。

「くううっ……これ……結構強く吸い付いてくるんだな……んっんっ……くふう」

「そうなんですか」

一体どんな感覚なのだろうかなんてことを考えつつ、リンの言葉に頷く。頷きながら、しっかりと吸い付いてくれてよかったとちよつと安堵した。

「やっぱりお前失礼なことを……」

刃みたいに瞳を細めて見つめて来る。

「そそそ、そんなことないですよ！ それじゃあ次はファイナだ!!」

騎士としてどんな時でも油断できないと思っている為か、リンはとても鋭い。慌てて逃げるように今度はファイナのスペースに入った。

「やっつとにゃ♪ にゃふふ……よろしくにゃ」

ニコリとファイナは太陽みtainな笑みを浮かべてくれる。

プリプリしている（まあそこが魅力的なのだけれど）マリーや今回に限ってはちよつと

怖いリンとは違い、凄く安心できる笑顔だった。

いや、感じるのは安心だけじゃない。

何故ならば――

「うん。それじゃあ、つけるね」

言葉と共にトップスをずらす。

途端にドタプンツという擬音がつきそうな程の勢いで乳房が露わとなった。丸みを帯びたゴム鞠みたいに柔らかな胸が……。

(凄……)

思わずゴクツと息を呑む。

本当に大きな胸だ。向こうの世界の雑誌に載っていたグラビアアイドル達の乳房に勝るとも劣らない程のボリュームがある。それでいて一切垂れてはいない。プリプリとした己の存在をこれでもかと誇示していた。

そんな胸の先端部は陥没している。乳頭が見えない。そこがまた妙に艶めかしさを感じさせた。

思わず見とれ、動きが止まってしまふ。

「どうかしたのにかにゃ？」

当然不思議に思ったファイナが首を傾げてみた。

「へ？ あ、なんでもない。その……それじゃあ……つけるね」

触りたい。揉んでみたい——抑えがたい程に欲望が膨れ上がって来る。

しかし、そんな本能に必死に抗いながら、ファイナの胸にも搾乳用触手を装着した。

「——ん？」

吸盤状に大きく膨らんだ触手に乳房全体を包み込まれた途端、不思議そうにファイナは首を傾げる。

「……どうかしたの？」

明らかに他の二人とは異なる反応だった。なんだか心配になり、異変がないかと尋ねる。

「へ？ あ、別になんでもないにゃ」

「そう？ だったらいいけど、何かおかしいことがあったらいつてね」

「もちろん分かってるにゃ！ にゃふふ……ハルキンは優しいにゃあ」

「は……ハルキンって……」

微妙な渾名に苦笑しつつ、ハルキはファイナのスペースから離れた。

「で、どうするの？」

「ここからはボクの仕事……見ていて」

その言葉と共にハルは杖を構え「ラステ・アーグナ・ファルネシア」呪文を唱えた。ぐっちゅ……ぬちゅうううっ！

同時に三人の乳房を包み込む触手が蠢き始める。

「あ……これ……なんだ？ あっひ……ひあああああつ！ くっふ……くううっ！ ああ

あ……挿入^{はい}って……くる？ 私の胸に……んくうう！ なんだこ……これはあ!？」

「ひゃふうううっ！ あっは……はひああああ……ズブズブって……潜り込んでくる。なにつ!! これ……あひんんっ！ な、何が……起きていますのお？」

途端にビクビクとマリィ達が悶え始めた。

「これって……一体？」

「……見れば分かる」

そう言うとはルはコツンツと春樹の頭を軽く杖で叩いてきた。

すると視界に変化が起きる。

乳房を包む触手の吸盤状になった先端部がガラスの様に透け、内部がどうなっているのか見える様になった。

「これ……挿入してる？ 三人のその……ち、乳首に細い触手が……」

触手の内部からゴム紐くらいの細い触手が伸びている。それが三人の乳首に挿し込まれていた。しかも、ただ挿し込んでいるだけではない。

ドクツドクツドクツ!

「くうう！ 流れ込んで来る。胸の中になんだか熱いものが……」

「あああ……これ、変ですわ？ なに？ 一体何が？ 胸が……あああ……張り詰めていく……くふんんっ」

挿し込まれた触手の先端から液体のようなものが、まるで射精の様に胸の中に流し込ま

れているのが分かった。

「何を流し込んでいるの？」

「すぐに分かる」

ハルは答えてくれない。

仕方がないので状況を見守ることにした。

そんな春樹の目の前で、さらなる変化が起きる。

じゅっぐ……ぐじゅるっ！　じゅずるるるううっ！

「吸われてる!?　ああ……これ……触手が……胸を……わたくしの胸を吸ってますわ。

ジュルジュルって……下品な音を立てながら……。あつく……んふううっ！」

「なんだこれ？　くふうう！　あっあっあっ！　こんな……ただ吸われているだけなのに、

身体中から力が抜けそうになる。それにこれ……何が……る……。胸の中から……あ

っぐ……何が……出そうになってる。なんだ……これは一体何が起きているんだ？」

マリー達の言葉通り、触手が乳房を吸引し始めた。三人の身体の中にあるものすべてを

吸い出そうとしているのではないかと思える程の勢いで……。

「ああ……これ……身体の中……全部が吸われてるみたいですよわあ。で……出る……。

ああ……わたくしの全部が吸われてくみたい……。なんだか……分からないけど……恥

ずかしい。凄く……恥ずかしいですよわあ」

「ああ……抑えられない。こんな……抵抗なんかできない……。あっあっあっ！　ホン



トに……くうう！ 胸の中から何かが来る……あああ……出る。こんな少し吸われただけなのに……こんなことって。はふあつ！ くふうううつ！」

確かに少し吸われただけでしかない。だというのに、触手に包まれた乳房が張り詰めていくのが分かる。マリリーの胸だけではない。べつたんこともいつていいリンの胸まで、張り詰め、なんだか少し大きくなっているようにさえ見えた。

「無理……我慢できない。ああ……見ないで。ハルキ……わたくしを見ないでえ！ 恥ずかしいからあ」

吸引に合わせてピクピクと肢体を震わせながら、マリリーが必死に訴えてくる。

しかし、マリリー達が頬を染め、瞳を潤ませ、唇を半開きにしながら熱感こもった吐息を漏らして悶える姿はあまりに艶めかしく、視線を外すことなど不可能だった。

「あああ……もう……無理。出る！ ハルキの前で……わたくし……あんんつ……。わたくしいいっつ」

「私もだ……もうっ……。あくううつ！ もうううううつ」

ハルキが見つめる目の前で、二人は肌をピンク色に染めていく。汗で全身を濡らす。乳首を痛々しい程に勃起させていく。

それと同時に――

どびゅばつ！ ぶびゅううううつ！！

「はあああああ……出てる。う……そ……。これ……おっぱい。わたくし……おっぱい出

してしまってますわあ。んっひ……はひあああつ！ あっあつ……はああああ

「そんな馬鹿なああ。出てる！ 胸から……ビュッビュッ……。こんな……あつふ……んふううう……。凄い。あああ……止まらない。母乳が……出てるうううっ」

二人の乳首から多量の母乳がビュビュウウツと触手の中に撃ち放たれた。これを触手が吸る。じゅっちゅ、ちゅずるるううっという音と共に……。

「んはあああ……止まりませんわ。恥ずかしい……。見ないで。あああ……出てる！ おっぱい……出続けてるう」

「あつふ……んはああああ……あつあつあつ……あはああああ……」

吸引に合わせて肢体を激しくビクつかせながら、二人はひたすら母乳を放ち続けた。「あああああ……はあつはあつはあつ……はふああああ……」

「もう……出ない……。無理だあ……んふあ……はあ……はあ……はあ……」
やがて二人はぐったりとその場に上半身を落とす。

腰だけを上げた姿勢で幾度となく熱い吐息を響かせた。

「こ……これって……」

「……母乳という形で呪いを噴出させた。これを毎日繰り返すことで、魔王による呪いの効果を薄めていく」

「なるほど……」

何となく納得しつつ、ぐったりした二人を見つめる。

プクツとファイナはふて腐れたように頬を膨らませる。

「すまん。でも、きつとその分ハルキはファイナを気持ちよくしてくれるはずだぞ」
するとリンが微笑みながらそんなことを言ってきた。

「ホントに？ ハルキン……ファイナのこと気持ちよくしてくれる？」

自分を背後から抱き締めるような体勢になっているハルキを顔上げて見つめる。

「もちろん。俺……頑張るよ！」

そう答えてくれた。

それが嬉しい。

「そっか、じゃあ許すにゃ♪」

笑いつつ、ファイナはグリグリと腰を振り、尻でハルキの肉棒を強く圧迫した。

「うあつ！ それ……気持ちいい」

これにハルキは敏感に反応する。

心地よさそうに表情を歪ませつつ、二度も射精した後とは思えない程に肉棒を膨れ上がらせてきた。

「ハルキンのおちんちん……凄くカタイにゃ。それに熱い。ファイナのお尻が火傷しちゃいそうな程にゃ」

ドクンッドクンッという鼓動が伝わってくる。

そのような淫らすぎる有様に、マリーやリンの痴態を見たことで既に濡れていた秘部か

ら、さらに愛液が溢れ出してきた。

肉褌がお漏らしでもしたみたいにグチョグチョになる。欲しい。一つになりたい——肉体がそう訴えているようだった。

「なんかもう我慢できそうにないにや。だからその……ハルキン……いい？ 挿入れても素直に想いを告げる。」

「ああ、俺も早くファイナと一つになりたいよ」

「そっか……それじゃあ挿入れるにや」

言葉と共にビキニを脱ぎ捨てると、肉棒に手をかけ、位置を調整する。そのまま腰を下ろし、ズブズブと肉壺でペニスを飲み込んでいった。いわゆる後背座位の体勢でハルキと繋がらあう。

「あつは……んふううつ……これ、挿入^はって来るにや。ファイナの膣中にハルキンの熱いのが……。んんんつ……。にんかこれ……。あつあつ……。き、気持ちいい」

肉壺が押し広げられていくのが分かる。下腹部に異物感が広がってきた。ゴツゴツとした肉槍の凹凸が膣壁を削るように擦り上げて来る。

途端に感じたものは痛みではなく、愉悦だった。

脳髓まで蕩けてしまいそうな程の心地よさを覚え、肢体をファイナは震わせる。

「にやんだらう？ ファイナもリンちゃん達と同じで初めてのはずなのに……。いきなり凄く感じちやつてるにや……。あつあつ……。血も……。出ない……。にやんでだらう？ は

ふああああ……」

ドジュンツと膣奥にまで肉槍が届く。

けれど結合部から血が溢れ出ることはなかった。

「ふむ……：そういうえば激しく運動をしていると処女膜が破れるという話を聞いたことがあるな。獣人は幼い頃から己の足で野を駆け回り狩猟をして暮らす種族だ。血が出なくても不思議ではないな」

リンがそんな感想を口にしてくる。

「そっか……：そんなことがあるんだにや……。あつふ……：んふううつ……。だとすると……：ちよつと得な感じがするにや」

覚悟していた痛みがない。それどころか初めから気持ちがいい——心が軽くなっていくのを感じた。

「ねえハルキン……：その……：リンちゃんという通りみたいだから……。遠慮する必要はないにや。たくさん……：たつきさんファイナを気持ちよくして」

「ああ、もちろんそのつもりだよ」

頷くと同時にハルキは腰を振り始める。座っている体勢のせいでそれ程激しい動きではない。ただ、それでも十分すぎるくらいにファイナの肉壺はかき混ぜられる。

「にやつふ！ ふにやあつ！ これ……：にやつにやつにやつ！ す……：スゴイにや！ 気持ちいい。膣中……：おま○こ……：おちんちんでかき混ぜられるの……：思ってた以上にずつ

とずっと気持ちがいいにや！ んんんっ！ はああああ……いいっ！ ハルキン……これ……すつごくいいにや！ にゃんつにゃんつにゃんんっ♥」

じゅっぶ……ぐじゅっぶ……じゅぶっじゅぶっじゅぶっじゅぶうううっ！

猫目を潤ませつつ、肉悦に表情を歪ませていく。ズンズンッと膣奥を突かれるたび、結合部からより多量の愛液を分泌させていった。

肉棒で膣壁を擦られる。子宮口を亀頭でノックされる——そのたびに尻尾がビクンッビクンッと揺れる。ヒクヒクとネコ耳を震わせながら、歓喜に蕩けた嬌声を響かせた。

しかし、まだ満足できない。もつともつと気持ちよくなりたいと貪欲に思ってしまう。

そんな自身の欲望にファイナは逆らわない。

「ハルキン……ハルキンも気持ちよくなって……。一緒に……あつあつ……ふあ、ファイナと……気持ちよくなるにやあつ♥」

言葉と共にファイナ自身も腰をくねらせ始めた。

ハルキと共に気持ちよくなりたい——わき上がる本能の赴くままに、肉壺全体を使って挿し込まれた肉槍を抜き上げていく。気持ちよくして欲しい。たくさん熱い汁を流し込んで欲しい——とでも訴える様に、腰の動きに合わせて襞の一枚一枚できつく肉茎を締めつけていった。

「くああ！ これ……いいよ！ 凄くいい！ くうう！ 出る。ファイナの膣中に……あああ……出しちゃいそうだ」

この動きが余程心地よかったのか、すぐにハルキは限界を訴えてきた。何度も射精してきたことで敏感になっているらしい肉棒が膣中で不気味な程に膨れ上がってくる。

「大きくなってる！ ファイナの膣中でハルキのおちんちんが……。これ……。すっごい！ はああああ……。変えられる。ハルキの形にファイナのおま○こが変えられてくみたい！ んんんつ……。すっごいよ。はああああ……。いいよ。出して。ファイナの膣中にハルキのせーえき……。びゅーびゅー出してえ♥」

精液の熱い感触を思い出す。あれを膣中に出される——想像するだけで凄く気持ちよさそうだった。

だから射精してくれと訴えつつ、ファイナはさらに腰の速度を上げていく。

「まだ、まだだよ！ もっとファイナを感じさせてからだ！」

しかし、ハルキはまだ射精しなかった。

必死に性感に耐えるような表情を浮かべつつ、ファイナの乳房を背後から鷲掴みにしてくる。乳房にハルキの指が食い込んできた。

「くひいいい！ あっ！ あああ……。お、おっばい！ んひいいい！ こんな……。だ、駄目！ ハルキン！ おちんちんでおま○こかき混ぜながらおっばいもなんて……。いけないにゃ！ くひいいい！ こんな感じすぎる。ファイナ……。気持ちよくなりすぎちゃうから駄目にゃああ！」

ほんの少し乳房を刺激されただけで、頭がおかしくなりそうな程の愉悦を覚えてしまう。

想定以上の快感に狂ったようにファイナは悶えた。

そんなファイナを責め立てるように、ハルキはさらにピストン速度を上げてくる。それと共に腰の動きに合わせるように激しく乳房を揉みしだいてきた。

「膣中と……おっぱい！ どっちも……はふううっ！ どっちもいいにや！ よすぎで……我慢できない！ ファイナ……もうっ！ あああ……い……イクッ！ イッチャウ！ ハルキン！ ファイナもう……我慢できないにやあああっ！」

下腹部だけじゃない。乳房まで熱く火照っていく。痛々しい程に乳頭が勃起した。胸の中から乳首に向かつて何かがわき上がって来る。

「これ……はあああ……出る！ ファイナ……おっぱい出る！ 抑えられない！ ハルキン……もうっ！ もうううっ！」

「ふあ、ファイナあああっ！」

ファイナの訴えに合わせるように、乳房を引き千切らんばかりに強く鷲掴みにしてくと共に、これまで以上に奥にまで——それこそ子宮がへしゃげそうな程の勢いでハルキは腰を突き込んできた。

どじゅううっ！

「くひいいいいっ！」

目の前が真っ白に染まる。

刹那——



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ジェノバ

戦うヒロインを屈辱とせざる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルとかわれない
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



女刑事美優

美優は自らの身体から

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!
アクターズノベルズ



異世界で
手に入る
アイテム

ドキドキクラブな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫